

4. Professionalism and leadership —Leader の条件—

埼玉医科大学名誉教授 平敷淳子

女性医師の歴史はわずか100年強である。女性が医学生として公的、私的な教育をうける場を探しだすことから始まり、公的に国家試験を受け、医師として認知されるにいたる経緯には、女性自身によるはかり知れない努力があった。忍耐と戦いの歴史。戦い抜いて、まずは自分が医師となり、女性のための教育の場を創立するに至った先人の歩みを思うとき、恵まれすぎている現在から後退だけはさせたくないと願っている。

教育の機会均等が当たり前の時代に学び、性別による差別なく、国家から教育の援助を受け、国家試験によって医師免許書が授与された医師は、それこそ性別を問わず生涯働き続けていくことが当たり前のこと。そこには、医療を生産産業、企業形態と同じスタンスで論じなければならない、社会的、経済的、財政的事情があると思う。産業や企業で、生産効率をあげ、労働コストを下げ、しかもアウトプットを増加させていくという原則が、医療でも当てはめられるのであろう。しかも、産業の大きな要因のひとつである労働力に、医療では増加する女性医師の問題が関わってくる。医療に従事しているものにとって、決して削ることのできない「医療の質」や医師が生涯持ち

続けなければならない医学的な知識の「competence」があるために、数学的に解決できない問題があるのであろう。

どうしたら、「生涯はたらきつづけられる」でしょう。女性医師のなかで priority をつけ、なにが、今できるかを問う。多様化した仕事の選択肢から最適なものを選び、期限をつけて働く。働く環境にいるすべての人の意識改革を図ることが大切と考えます。

高度の知的習得と研鑽を要求される医学、医療での Professionalism の遂行には、「甘え」は許されない。専門家としての自覚、たゆまぬ努力が必要である。その中で、自己満足ではなく、leader としての活動へと進めれば、はじめて professionalism が意味を持つてくるのであろう。

Leader は育てていくものでもあり、自分のなかから育てていかなければならないものでもあろう。大学では、少なくとも専門分野では個性に応じた、あるいは個性を生かしたメニューで多くの人材を教育してきた。性別、年齢、国籍、宗教は問わず、しかし性格、環境、個人の生き方、周囲との交わり方、とくに感性など多変量の因子を考慮しての教育は、leader として楽しみでもあった。

平敷淳子氏プロフィール



1964年東京女子医科大学卒業。ただちにアメリカの医学、医療の研修システムに入り、Johns Hopkins Hospital で放射線科レジデントを終了。同病院で assistant professor となり、群馬大学医学部助教授として赴任。1987年から埼玉医科大学放射線医学講座主任教授。2006年定年退職。2007-2010年国際女医会会長。2004年と2010年国連総会日本政府代表顧問として第3委員会（人権問題）に参加。

“Professionalism and Leadership”を key words に国内外で啓蒙をしている。
専門：画像診断、血液疾患の画像診断、磁気共鳴医学。